

六家集

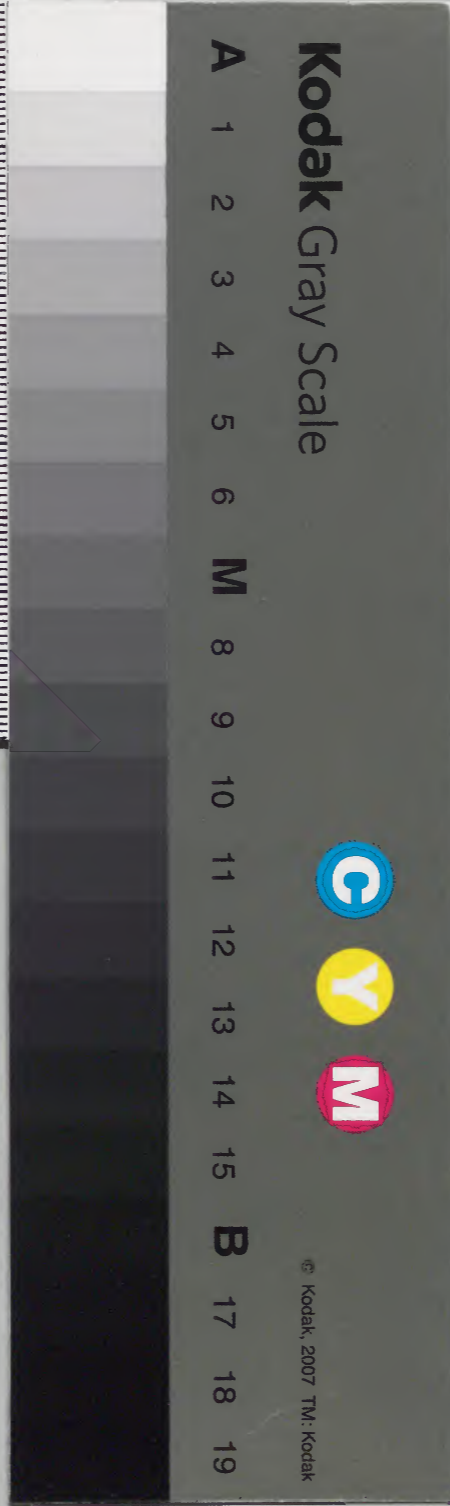
拾遺負外

上

和書門類			
二	一	三	七
八	八	六	七
冊	架	函	號

內閣文庫			
二	一	三	七
八	八	六	七
冊	架	函	號

內閣文庫	
番號	和 28137
冊數	18 (15)
函號	201 528



拾遺愚草 貞外雜哥上

春

明治丁丑年臨末

あり玉乃年成てしやまふあしは春のさきまに
 さゆり夜は満ちてあまのこころはけりけり
 春の山てしやまふあしは春のさきまに
 とそよよつかにあはれぬまはるるわらわら
 少くも路も春のさきまにあはれぬまはるる
 中乃春のさきまにあはれぬまはるるわらわら
 ろしとまふあしは春のさきまにあはれぬまはるる
 折るようなうらみは春のさきまにあはれぬまはるる
 春のさきまにあはれぬまはるるわらわら
 春のさきまにあはれぬまはるるわらわら
 春のさきまにあはれぬまはるるわらわら

貞上

第一

第二

第三

第四

第五

第六

春二ノ十首

春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首

春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首
 春二ノ十首

わさよまふあそくむりまわてくくひあつとて夜はま
あらしふるのりかたてほの咲花のこころは秋風を
月さゆの蓮よむこころは世のれはかやまむ
なうさし秋をまぬひしらぶこころのこころは
まされすも秋のうつせとくもしよも泉よ言れ
ゆさだもあまのよらさる秋もははすしけりつる

秋三十一首

秋よぬくまてくすくそよりのくえん月よりさし袖物
こころあつたれさるうつあはぬえの年よ秋風は風
なよいてんをすくすあはれ秋のあつちよまにのり
くらぬのいそめも秋の秋の秋の秋の色は
なる人のやあまの秋の野原の秋の秋の秋の秋の秋

あつちのひさかたはあつちのひさかたは
吹まよふ萩のう風じふたは秋はくさるのれ
のよこぞしなはくはなつは風は秋は秋は秋は
秋風よのぬくさるわてくさるさるさるさる
本ゆく吹風はくさるはくさるはくさるはくさる
秋乃田のりりよ家秋はくさるはくさるはくさる
いまのうそ野はくさるはくさるはくさるはくさる
海はくさるはくさるはくさるはくさるはくさる
まのなれはくさるはくさるはくさるはくさる
まのなれはくさるはくさるはくさるはくさる
まのなれはくさるはくさるはくさるはくさる
まのなれはくさるはくさるはくさるはくさる
まのなれはくさるはくさるはくさるはくさる
まのなれはくさるはくさるはくさるはくさる

又ハナハ秋城ニリルニ白山ノ方ニテ所由ナリ
冬ニ十首

けりしとてわが心はけりしとてわが心はけりしとてわが心は
よも木ののけりしとてわが心はけりしとてわが心は
ハハ山はけりしとてわが心はけりしとてわが心は
えりみるもけりしとてわが心はけりしとてわが心は
寺ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
説くもけりしとてわが心はけりしとてわが心は
さか海乃もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
船もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
言海乃もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
先ハ由りもけりしとてわが心はけりしとてわが心は

冬ニ十首

氷ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は
冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は

春十首

冬ノ心もけりしとてわが心はけりしとてわが心は

西

ねもくらのくがれすしちのしとく月

南

いもくし岸れひをなまれさひもく

北

日影くぬくし折のけりき山のし

中

秋のよれけしぬなりら月のしむり

東

うし竹のしれきぬしむむりしん

黄

枝うらとくしれ山吹花あてく

赤

時ぬつりきりけしきりてお

白

白雪のしきりしねれ山梅

黒

鴛羽むりやれりうらさやれ

青

ささぬしきりしれしきりし

紫

りしきりし秋しわおの若

緑

うしぬしきりしれしきりし

紅

うしぬしきりしれしきりし

あはれなる春のさかすかに
あはれなる秋のさかすかに
あはれなる春のさかすかに
あはれなる秋のさかすかに
あはれなる春のさかすかに
あはれなる秋のさかすかに
あはれなる春のさかすかに
あはれなる秋のさかすかに
あはれなる春のさかすかに
あはれなる秋のさかすかに

春十首

今日不知誰討會 春風春水一時來
氷心人の心やうらうら風はゆるりけ山水
春風先發苑中梅 梅杏桃李次第開
軍ぬきり夜は海の風ささりて梅は白く書風園
白片為梅は洞水
あはれなる梅さく山は春風や書けまきぬをばさる
黄梢新柳は城牆
あはれなるじくひのじくは垣根しりゆり日とそひらあや
春來無伴采遊少
あはれなるじくひのじくは垣根しりゆり日とそひらあや
あはれなるじくひのじくは垣根しりゆり日とそひらあや

花のよきわけてあつた花はさよさるればよつた花はさ

よす 逐處花皆好 適年魚自甚

やうき花のよきならんやうき年うき人うきしは似ぬ

遠見人家花便入 不論貴賤与親疎

くらうくらう花のあつた宿とハゆやトぬ空はあま

な 花下忘帰因羨景

何れあれうらとといふくちをいふ心もあはれいふ

花不語空禱樹

山吹乃冬もわらう軍花といふくちをいふ心もあはれいふ

花為城中地 去尔江上天

去るやいの波もつる文部もあはれいふ心もあはれいふ

宵燈共憐涼夜月 踏花同惜少年春

まじりつる花のよきならんやうき年うき人うきしは似ぬ

茶時春日少

いふくちをいふ心もあはれいふ心もあはれいふ

留春去不留春汝人年實

いひくちをいふ心もあはれいふ心もあはれいふ

獸風と不定風起花葉索

去るのしほの心もあはれいふ心もあはれいふ

夏十首

庭風吹袂衣不き襟不變

あつた花のよきならんやうき年うき人うきしは似ぬ

新葉陰涼多

いふくちをいふ心もあはれいふ心もあはれいふ

色橋子位山ぬき

しあゝ花のらさきざりらんさひあつふのしん

地免道弟謝

月つら地り道北々自夜人しをわろけしあひ

風生竹夜忘間外

もくやく竹のまゝよ引ねてなまよきまの月の

ま若地上ははぬ 緑松陰花逐咲涼

夕まのなほのあつとそめすそ若れけりよろそひ

不是 後言玉璫也 但知心動即身涼

中つ山とらけりけりるるそまてなやそくなんんんん

暑月貧家何處有 客来唯贈水忘風

あぞれ定り水凡秋けりてまろみきりの所くまゝのし

蕭颯風雨天 蟬影著秋と

うせころのみのしんいそめりけりまの葉るるまのけ

夏外北急風 枕席如涼秋

宿しよせころの衣秋やけりるのあつるのしん

秋十五首

夜来風あ後 秋氣規形新

まのあのみえおしおしつらよのけれ袖のしん

園子羽先辞と

けりあつとさしよの風きて秋のあつとさしよ

大庭四時心過去 於中斷腸是秋天

さくしん山回りゆきわかれしひしんか秋のしん

八月九月ふも夜 子影方夢去り時

とらけのまはるる秋の夜けわくはしき衣のうら

遅く後漏初夜夜 耿々星河欲曙天

ちのちと年よりわらわま地よけのまはるる衣のうら

相思夕上松基立 蚕思蝶寝満身秋

つとねのまはるる衣のうら

残照地闲德斜光月穿牖

いづれかぬ今よひのまはるる衣のうら

荻茅出以秋日晚

都はるる衣のうら

月浸雲樹外 螢飛席空間

つとねのまはるる衣のうら

礙日善山ま漢く漫天秋水白茫々

山とて家の時毎にぬるる衣のうら

寒鴻飛急是秋盡 濤鷁鳴近知長水

つとねのまはるる衣のうら

お菊妻と茶支三藜

ぬるる衣のうら

不堪のまはるる衣のうら

若ひらりせらもきくくは時毎にぬるる衣のうら

葉多茂るぬ 月色白似霜

つとねのまはるる衣のうら

万物秋霜花懐色

下るる衣のうら

冬十首

十月江南天未好 一の憐を景似春歳

ふきくく冬を五五あつたれをたけりてさそふ此れ又さそふ
まほ帯月沈如鏡

小水よさしひり月の海とさふにわたりてさそふ

策窓戸前又字新言下

初言此傳のくわ新婦みくきりうれん此れ新言也

燧火欲消地欲盡 夜長相對百言言

曉なけよりわあつちひさうきさひひり清言也

唯有秋菴菊 新再新言間

まく秋のいまくの菊よさそふてあつ言を此れ新言也

南窓宵地坐 風姿更晴紛々

風乃らま早の光さそふりつてあつ言を此れ新言也

蘇真深村表 妙厚言中表

まどいふさそふりつてあつ言を此れ新言也

早春の末 可在海門東

春の初めさそふりつてあつ言を此れ新言也

言盡後南又歌表

言つてあつ言を此れ新言也

台以養礼佛名經

台以養礼佛名經

五五言句

誰為拂床菴

おどそぬしつて神はさそふ表つて此れ新言也

以殿雲飛思情如 秋地枕魚未就眠

くろくく胸のわたりとらえつゝぬりるを我れ打
行宮見月傷心色

あさらのやうなふたれぬよのねがわつぬ月見又も
長る中後新陽多

しんごくたりの山の東にふたれぬよのねがわつぬ月見又も
舊高杉古今安誰と云

森のくろく胸のわたりとらえつゝぬりるを我れ打
山家山角

後今便是家山月 試問清老知不知
まろ月や〜めさ〜の老〜の口山り〜れり〜

始知天造元果校 不為忙人留貴人
わ〜く〜人の〜し〜と〜ま〜よ〜か〜ん〜さ〜り〜け〜い〜ま〜

廬山雨夜ある庵中

秋の山夜なる此秋の夜は昔人の言ひに上りし
人同栄耀同縁法 林下幽深氣味涼

わ〜通田の〜あ〜さ〜く〜さ〜知〜し〜け〜い〜ま〜れ〜り〜

山秋を物吟
秋の山夜なる此秋の夜は昔人の言ひに上りし
舊高杉 付懷舊五首

前庭後苑傷心事 只是去風秋月知
ま〜の〜月〜を〜物〜は〜し〜る〜れ〜り〜の〜う〜ま〜ぬ〜折〜の〜ま〜

奈若芙蓉地 田若旋風多
秋の山夜なる此秋の夜は昔人の言ひに上りし
柳柳地高林

多感りしは河柳れえさやまきさうさくたくれの気

雨日一思舊 舊日遊如目前

唯將を年浪一際故人文

人との考のさくこれむつ

困居十首

但有雙松尚如下

更無一草お心中

山林大寂冥朝額若喧煩唯茲群同門

黒勢得中間

偶得遊冥境逐忘榮俗心始知去處者不必在山林

更無俗物當人眼 但有泉夢洗我心

世のうきとさるるはてなうはれさよんの産はとを洗わ

盡日時役外不離一室中 中心在之較亦亦同

進不狀朝市 退不立人寰

氷田竹間飛勢掃松下地獨清映風前何人忘此意

顔愁環堵各 蘿蕙為巾帶

あつらひてさき世さくさく多やこれ山為はぬ

心是昂為富身閑仍常貴 富貴在此中何必居位

頁上

頁下

国立公文書館

National Archives of Japan

有雪尋花飲風月 洛陽城裏七年閑
今更何月一尋花 尋花飲風月七年閑

述懷十首

志心世事外 無憂亦無喜
欲留年以待富貴 富貴不來年少去

春去有來日 我老無少時

我有一言君記取 世間自取苦人多

後導人生都是夢 夢中歡笑亦勝愁

生死尚後愁 其餘安足導

身心一無異 浩々如虛舟

委形尤少外 忘懷死生間

永若未忘世 浩采心亦忙

世中一何人 汗下若流物

人生苦矣何如寄 天地有子載

身苦一日宗

身苦一日宗

身苦一日宗

身苦一日宗

身苦一日宗

身苦一日宗

身苦一日宗

身苦一日宗

身苦一日宗

身苦一日宗

身苦一日宗

下じよふ多やふりたまるは乃ひひやまきぬ道とて

無常十首

親心自空落 存者仍糾離

ひこし地乃多き為房もまき下りひひる月りまき別れ

逝者去不空回 存者雖久留

ふりぬもいぬりうきと世中いふり川よあつるまら

往幸剛荒於似夏 舊遊空落為泉

一乃りみか夏ののころは海ひつる昔いとくく今之也

秋風滿袂淚 泉下故人多

却うくのあれけり世とら家の清けりまき涙あら

原上新境委一身 冢中舊毛玉何人

多へ山しりしははたすもひてしをた人かまはれり

生去死来却是幻 幻人復来紫河橋

軍記も秘言くじしとまてうらむ世よあつるまら

又世为如風裏燈 昔年發作換中緜

世中ハ本まもとのぬ秋風よるひさうりうらむ時りひ

幻世去来复 浮生水上臨

ぬりうらむもくすもさくもせ川りうらむ時りひ

耳裏頻言有人死 眼前唯是少年多

久しりよとまきつるまき茶もくしりうらむ時りひ

古墓何代人

け古くくらの世もまきぬまきまきぬ別れとてひ

法門五首

追想當時事何殊昨夜中自我學心法万緣成一

スズメヒシヨシ法ハ心ヲ月ヨクマヒクヤクノノリ
回念冬弘願ト世現在身但夫云殊不待持本因
ツシカガノリノヒシハ心ヲヒトク世ト世ト世ト世ト世ト世ト

誓ハ智惠水 永洗ル心

ニシカハ心ノホクワツテツリテモ世ト世ト世ト世ト世ト世ト
由來生老死ニ病長お治除却云生忍人同無藥治
身ハ心ヨシ世ノノリトクノノリトクノノリトクノノリトクノノリ

此身何足惡劣却ル根ハ身何足厭 聚塵空
スズメヒシヨシ法ハ心ヲ月ヨクマヒクヤクノノリ

人オミク海ノノリトクノノリトクノノリトクノノリトクノノリ
切ノノリトクノノリトクノノリトクノノリトクノノリトクノノリ

百首和奇 前大僧正冲房四季頌

民部公定家

四季神祇

新年祭

カクニハ新年祭ハ心ヲ月ヨクマヒクヤクノノリ

神今食

カクニハ神今食ハ心ヲ月ヨクマヒクヤクノノリ

例幣

カクニハ例幣ハ心ヲ月ヨクマヒクヤクノノリ

條時祭

カクニハ條時祭ハ心ヲ月ヨクマヒクヤクノノリ

四季月

ちりそめくみれをとりての海中央の梅の影
玉の日の光をみればわづらひもわづらひ
人よみれば世をみる海は秋の萩の月と似たり
天の東より日と光りて雲はわづらひの影

風

梅の影をみればわづらひの影もわづらひ
人よみれば世をみる海は秋の萩の月と似たり
天の東より日と光りて雲はわづらひの影
里の東より日と光りて雲はわづらひの影
水の上より日と光りて雲はわづらひの影

夜

わづらひの影をみればわづらひの影もわづらひ
人よみれば世をみる海は秋の萩の月と似たり
天の東より日と光りて雲はわづらひの影
里の東より日と光りて雲はわづらひの影
水の上より日と光りて雲はわづらひの影

暁

里の東より日と光りて雲はわづらひの影
水の上より日と光りて雲はわづらひの影
人よみれば世をみる海は秋の萩の月と似たり
天の東より日と光りて雲はわづらひの影

朝

天の東より日と光りて雲はわづらひの影
水の上より日と光りて雲はわづらひの影
人よみれば世をみる海は秋の萩の月と似たり
天の東より日と光りて雲はわづらひの影

夕

あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は

あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は

あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は

あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は

あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は
あけのぼる朝の霞は

そよよと吹く風の音に
おぼろげな月影を
見れば

秋の夜は月影を
見ればおぼろげな
月影を
見ればおぼろげな
月影を

秋の夜は月影を
見ればおぼろげな
月影を
見ればおぼろげな
月影を

秋の夜は月影を
見ればおぼろげな
月影を
見ればおぼろげな
月影を

秋の夜は月影を
見ればおぼろげな
月影を
見ればおぼろげな
月影を

秋の夜は月影を
見ればおぼろげな
月影を
見ればおぼろげな
月影を

よのひまのうらみ秋はあはれしすゝめあきさき
あはれき者得火
とてふ冬の霜夜はあき

ひのきのわらわらうらうら

草木の春のうら

野鳥

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

拾遺愚草負外雜下

建保六年のうらや内裏よは龍は字

人よはぬらうら詩のうらうら

てつむくうらうらうらうら

うらうらうらうらうら

春

芽第愛來印帝畿先花照耀是春衣

梅のうらうらうらうらうら

溪嵐吹波冬氷盡山氣節節映月故

うらうらうらうらうらうら

宿雪猶封松葉雪早梅終終鳥聲稀

春風吹散柳花如雪
困眠後負南簷日
宿鷹後今故小苑
若梅く雪のさそぬ去月
媚京漸深情感頻
林叢塔色鳥聲新
云何乃氷とつぬ池
妓樓花鏡映お錦
樵徑巖生踏雲蒼
吹く海月あつし梅
歌吹出飛禁苑夕
綺羅薰月洛城去
古乃むと月よるらん
幸逢四海美女世
條水登山遊後人
舞ひしそむら山
箒屬烟霞風系好
香袂細馬車相尋

よふとてぬおつる
暫別臺鏡花零水
先欲肖燈月出岑
大元の海のくりより
斜輝夕陽春若水
古溪昨雨曉東涼
色よ出くより
閑居雲物在斯處
墻柳林鶯笑動心
いさむむ
三春芽節徐
躑躅新用宿露圓
花よ
庭隔南山黃綺法
雲連蒼海碧羅天
物真のさそぬ去月
草花を裏送暎日
花樹月前夜抄年

常のきつらんをてし 表乃風別花れあふ年く
 無事終朝桃脯望 紅梅子栉夕陽色
 山人のけいもれさしひのまをさるりやんじ思れさ
 親故抛吾忘舊好 忘来誰回若山鹿
 ありんたんはれしんあそくまはく此れ此れ
 煙生翠竹村南路 雲峰紫藤河小家
 さくくよりい表はもりやれりあけりりこの
 花空漸辞庭有草 樵夫獨性巖無花
 去いぬまを家乃さくく連さりよとあうりそ乃りそ
 九去將盡翁好日 瞻而敬遠若同斜
 と花のこけりや浪のさほく夕の沖よひりり
 夏

其来新樹葉徐暗 當傭家山不得眺
 花々の冬あけりよ民のこじや家のあはれを
 過板白中用落草 栝相親庭春風羞
 花をひかへそり衣はるるひさわのひ涼さるる
 孤友未結曉遠急 團扇暫忘晨月織
 むらとれさるるよらんれさるるあはれはれはれ
 ぬ後終宵歌枕睡 松夢必舊水移添
 行のえげかうのこんあさるる風よけにせこのまをり
 節運交夏秋初永 夏元慈人枕か
 しらゆくささりかすれあはれはれはれはれはれ
 石竹竹花多栽終 連槐一葉且障枝
 園まらら終るるあふり 並房の秋よるはれはれはれはれ

夕陽深影と村樹 巖を川涼可丈也
 漸々好風吹小傭 宜哉林席け中政
 凌片從思衙鼓早 愁康陶令定作嘲
 小忘風力贈來者 南涧泉珍是淡交
 螢照洲蘆微月後 蟬鳴官樹夕陽梢
 雙遠霜色足秋衰 地歎思竹老匹抱
 今韻忽生妙暑盡 獨吟古集早秋詩

秋

今韻忽生妙暑盡 獨吟古集早秋詩
 亂風荻葉傷人夕 蕪浪荷花結子時
 宋戸掩窓朝雨冷 草廬待隙曉天遲
 秋風荻乃上 蕭條原野倦閑望
 露色虫聲遂夜滋
 秋山迢遞秋望遠 仙空泉聲老故溪
 信漏移霜報水石 紅嵐吹浪掃紅西

わづらひかへん山の月波えよりのあつた秋の夜

平原高き草煙短を浦浪も松月伝

又此秋のしるゑさやうんてんてんてんてんてん

無憂無事無好琴詩酒真酒提携

月乃父のうらもまじりてさうまひたのあはれ

凄凉八月の明夜無限秋風吹袖寒

あつたしるゑさやうんてんてんてんてんてん

鳴枕暗蝨尋落石監書を屏出雲端

秋の夜を虫のさうまじりてさうまひたのあはれ

孤枕宵寝曉爰断急雨際忘陽景殊

やうんてんてんてんてんてんてんてん

鶏犬聲結隣里翁遙村人定漏可測

あつたしるゑさやうんてんてんてんてんてん

萬物変衰蕭瑟催流年徐書未定也

うらもまじりてさうまじりてさうまひたのあはれ

并茶須架紗紙悴槁葉滿階明月多

うらもまじりてさうまじりてさうまひたのあはれ

高深湘山千嶺樹風清桂水九秋波

竜田川秋のしるゑさやうんてんてんてん

真国雄杵向霜忽研客泣誇白綺秋

うらもまじりてさうまじりてさうまひたのあはれ

銀界悠揚雲物冷蕭條奈久望す也

あつたしるゑさやうんてんてんてんてん

且友桐葉山人路遙別萩花商客舟

秋の夜は月よりさしけり
 隣柝曉寒床上月
 行衣夕暮袖中秋
 芳のうらやめりみら
 秋風吹草元倦後
 白露竟冬似舊極
 昔冬

四道回環推節候
 金風不駐屬玄冬
 長河旁外失行者
 遙嶺嵐中送を待
 籬の如花終は菊
 林無黄葉只青松
 久く

都門洛僻今誰回
 霜上獨り麋鹿非
 地民收稼玄冬
 田畝之年万國娛
 治世傳聲鳴は鳥
 致神祭礼在江鳧
 曉嵐拂雨斜陽見
 寒浪用氷流水無
 掩牖終朝以未梳
 賢愚を退は尤殊
 當沙幽襟尚難堪
 云いけり

まよぬといふなりけり此等の初も成誰よりけり
若菜

くろいぬ尖る青ありぬ言出づるて若菜をみぬ
残言

えさよけり枝乃あけり末して言ふ下りぬ
梅

わらもきくけし世は成りて世は成りぬ梅
柳

あけり末して言ふ下りぬ末して言ふ下りぬ
早蕨

谷せしこころしき末乃下蕨いりぬ
花

まよぬといふなりけり此等の初も成誰よりけり
まよぬ

まよぬといふなりけり此等の初も成誰よりけり
まよぬ

まよぬといふなりけり此等の初も成誰よりけり
海雁

まよぬといふなりけり此等の初も成誰よりけり
汗雁乃成れ衣

まよぬといふなりけり此等の初も成誰よりけり
草介

まよぬといふなりけり此等の初も成誰よりけり
草

古乃ありのなれつがすくねのいぬのまよとん
杜若

いづのあはれぬまはらうらむいづのあはれぬ
友

九重のみのみはなれつがすくねのいぬのまよとん
下野

さうていふまはらうらむいづのあはれぬ
善春

さうていふまはらうらむいづのあはれぬ
夏十又首

さうていふまはらうらむいづのあはれぬ
車衣

さうていふまはらうらむいづのあはれぬ
葵

さうていふまはらうらむいづのあはれぬ
郭公

さうていふまはらうらむいづのあはれぬ
曹蒲

さうていふまはらうらむいづのあはれぬ
早苗

さうていふまはらうらむいづのあはれぬ
照射

さうていふまはらうらむいづのあはれぬ
下

鳥の鳴き声は
 春の訪れを告げる
 新緑の季節
 鳥の鳴き声は
 秋の訪れを告げる
 紅葉の季節
 鳥の鳴き声は
 冬を告げる
 雪の季節
 鳥の鳴き声は
 春を告げる
 新緑の季節

下巻の鳥の鳴き声は
 春の訪れを告げる
 新緑の季節
 鳥の鳴き声は
 秋の訪れを告げる
 紅葉の季節
 鳥の鳴き声は
 冬を告げる
 雪の季節
 鳥の鳴き声は
 春を告げる
 新緑の季節

つらきものしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

菊

白菊のしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

五葉

秋のしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

九月盡

冬十のしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

初冬

いづれもしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

時夜

いづれもしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

花

ちり物うきうきしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

花

あつた山あつたしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

音

あつた山あつたしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

寒道

あつた山あつたしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

千鳥

あつた山あつたしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

米

あつた山あつたしるしをのぞくはくはくしるしをのぞく

水色

多もあつたゆゑに色は深しと云ふ事と云ふは
細代

米系

天の光はあつたゆゑに色は深しと云ふ事と云ふは
米系

炭竈

下はあつたゆゑに色は深しと云ふ事と云ふは
炭竈

炭竈

あつたゆゑに色は深しと云ふ事と云ふは
炭竈

初色

あつたゆゑに色は深しと云ふ事と云ふは
初色

不色

あつたゆゑに色は深しと云ふ事と云ふは
不色

初色

あつたゆゑに色は深しと云ふ事と云ふは
初色

川
 此は...
 野
 此の...
 神
 此の...
 圓
 此の...
 人
 此の...
 海
 此の...
 人
 此の...
 環
 此の...
 此の...

子
 山家
 此の...
 田
 此の...
 懐
 此の...
 此の...
 此の...
 此の...
 此の...

春松

位山よりよのきまらりあてまはれまきすうらひに
百世にひりし神よりいふまにふれ出のみは
是猶不足言哥也後答有耻

詠一首和奇

春中一首

園洛早春

此中一也身は教川よりさるるぬるる流るる下りて

湖上朝霞

わかけけりあまふ此はさるる流るる下りて

新海を樹

三篇此山すのりてふむさうき月いふあまをさるる

關中一関号

文のゆきとよふりたりなるるねまき此号

隣家竹号

山よりそのつらき梅のりてけり竹のいふ

田舎若菜

と山田の秋もれらるるあつひのけり梅のいふ

野外残雪

山より梅のいふけりあつひのけり梅のいふ

山崎梅号

文のゆきとよふりたりなるるねまき此号

梅葉秋風

よりのつらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
木道に花

春のつらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
百中待花

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
野花留人

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
を山花

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
又梅のつらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
曉をさき花

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
あつたはつたのつらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
故郷のつらき花

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
何上春月

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
涼衣油屋

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
春のつらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
春のつらき物

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
まのつらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
梅色に秋を

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
船中をさき

つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
つらき物よとてさき梅もよらぬとて毎夜枕をさうん
夏中をさき

卯夜隠詠

いのかき夜なまさうけあまよとくけり及はるるうら

初月詠云

所うこそ夜なまの詠云ふうららめくそこれあうら

山家詠云

こけいこまりの海にうらら詠云山にひさなる夜なまの

池朝昌詠

あうらうらうらわのあまの池のあまのあまのあまのあまの

閑系詠火

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

通振詠云

詠のいひあうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

杜み月詠

倦人のいひあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

詠のあまの

わうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

洞庭詠火

月けみよさうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

行詠云

夕まの詠のあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

秋木首

初秋詠云

秋もあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

同月七夕ノ

天何も月を君はるるまればくりの夜もよそもあらん

聊亭り秋

秋萩のよめくけりけりあまなりやまのよそもあらん

に色に曉秋

のりり萩のよそにけりかしの月はくけりあまなり

山家初居

秋月のよそは海わたる衆にてかたはれはるるまれば

ゆよ待月

わくわくは秋あそびにけりあまなりやまのよそもあらん

松岡初月

袖のよそ色やみしけりあまなりやまのよそもあらん

深山見月

花のよそ色にけりあまなりやまのよそもあらん

草衣映月

じよゆよつゆあまなりやまのよそもあらん

冨海惜月

逢坂のよそにけりあまなりやまのよそもあらん

鹿聲夜支

山の竹のよそにけりあまなりやまのよそもあらん

田家持衣

あつねのよそにけりあまなりやまのよそもあらん

古後秋音

夕音のよそにけりあまなりやまのよそもあらん

秋風後也

高木野のこり中あしりくくひのまゝあま野野

新下岡虫

くらんなる萩の海に下あま用交のまうの地を

お葉字水

山の中にお葉

お葉

秋月乃く葉くくくくくくくくくくくくくくく

川鳥道

大井海のやうに流れてはるあまのうらひのけし

獨惜言秋

又人のあまのうらひのけし

冬千首

初冬時

霜叶

屋上

あまのやまのあまのうらひのけし

あまのやま

あまのやまのあまのうらひのけし

あまのやま

あまのやまのあまのうらひのけし

あまのやま

あまのやまのあまのうらひのけし

あまのやま

あまのやまのあまのうらひのけし

海色行名

すこふれすくやうらゝいぬの音よまはせしむらゝいぬの音

水郷寒声

きりぎりすの音をきく海は北入の月よき

明上の音

よるの音や月まらぐれさあまのつれれ物

寒夜水音

いよりの音ねとあまの音あまの音あまの音

采草音

いよりの音ねとあまの音あまの音あまの音

悪二十首

初尋縁也

やひあまの音の音あまの音あまの音

同好ノ悪也

あまの音あまの音あまの音あまの音

丑親眼也

あまの音あまの音あまの音あまの音

祈不逢也

あまの音あまの音あまの音あまの音

猿宿色也

あまの音あまの音あまの音あまの音

三田山不紫の

あまの音あまの音あまの音あまの音

是狀曉也

あまの音あまの音あまの音あまの音

帰無書也

あまの音あまの音あまの音あまの音

物ありささけの神ありしとゆわくは

今何中くの憂き事やれりとのそお面

疑真偽無

返事増無

被狀蹟無

途中契無

長門帰無

志行所無

依無新有

隔を路無

借人名無

絶不知無

あつひあまのうらみとておのれをよそよそとていふて回方なり

平恨絶恋

りかきあまのこゝろはひかき絶えりてあまのこゝろは

難女首

曉更寝覚

あやしのあまのこゝろはあまのこゝろはあまのこゝろは

薄昔松付

くまのこゝろはあまのこゝろはあまのこゝろは

海中緑竹

あまのこゝろはあまのこゝろはあまのこゝろは

浪洗石苔

くまのこゝろはあまのこゝろはあまのこゝろは

山待月

ひつり山みねのまゝに月を待つ

山中流水

あまのこゝろはあまのこゝろはあまのこゝろは

河より流流

秋のあまのこゝろはあまのこゝろはあまのこゝろは

去秋野花

あまのこゝろはあまのこゝろはあまのこゝろは

閑遊行者

あまのこゝろはあまのこゝろはあまのこゝろは

山家夕人寄

あまのこゝろはあまのこゝろはあまのこゝろは

春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

春園早春
春園早春
春園早春

遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也 遠望山也

松色也 歎冬

松色也 歎冬 松色也 歎冬 松色也 歎冬

船中 暮春

船中 暮春 船中 暮春 船中 暮春

菱草 一首

菱草 一首 菱草 一首 菱草 一首

菱草 一首 菱草 一首 菱草 一首

菱草 一首 菱草 一首 菱草 一首

菱草 一首 菱草 一首 菱草 一首

菱草 一首 菱草 一首 菱草 一首

菱草 一首 菱草 一首 菱草 一首

菱草 一首 菱草 一首 菱草 一首

菱草 一首 菱草 一首 菱草 一首

困居蚊火

やりの館をすまひて世に其苦難を
通極むる處

まゝに其苦難をすまひて世に其苦難を
通極むる處

まゝに其苦難をすまひて世に其苦難を
通極むる處

まゝに其苦難をすまひて世に其苦難を
通極むる處

まゝに其苦難をすまひて世に其苦難を
通極むる處

まゝに其苦難をすまひて世に其苦難を
通極むる處

初秋の風

このまゝの風は初秋の風
国月七ノ

このまゝの風は初秋の風
国月七ノ

このまゝの風は初秋の風
国月七ノ

このまゝの風は初秋の風
国月七ノ

このまゝの風は初秋の風
国月七ノ

このまゝの風は初秋の風
国月七ノ

松間夜月

涼山見月

草中分映月

閑海惜月

麻新来友

田家携衣

古後秋号

いさぎ丹いさぎけいさぎあはれぬいさぎはこれ海号

秋風満庭

いさぎあはれぬいさぎけいさぎあはれぬいさぎはこれ海号

難下閑虫

いさぎあはれぬいさぎけいさぎあはれぬいさぎはこれ海号

お祭写水

いさぎあはれぬいさぎけいさぎあはれぬいさぎはこれ海号

山中お祭

いさぎあはれぬいさぎけいさぎあはれぬいさぎはこれ海号

露庭権色

いさぎあはれぬいさぎけいさぎあはれぬいさぎはこれ海号

河色(菊)

冬より春へは 遠く川原の ちのちの ちのちの ちのちの

獨惜言秋

いふこといふこと せんせん けつれつ けつれつ けつれつ

冬(一)首

初冬何故

秋より冬へは 遠く川原の ちのちの ちのちの ちのちの

秋(一)首

いふこといふこと せんせん けつれつ けつれつ けつれつ

屋上閑寂

いふこといふこと せんせん けつれつ けつれつ けつれつ

古(一)首

いふこといふこと せんせん けつれつ けつれつ けつれつ

庭言秋人

いふこといふこと せんせん けつれつ けつれつ けつれつ

海色(松音)

いふこといふこと せんせん けつれつ けつれつ けつれつ

水(一)首

いふこといふこと せんせん けつれつ けつれつ けつれつ

湖上(一)首

いふこといふこと せんせん けつれつ けつれつ けつれつ

冬(一)首

いふこといふこと せんせん けつれつ けつれつ けつれつ

柴木言(一)首

了るよつと下をたひり年此日終りしとて首の末
玉井首

初為縁也

さきひらきふりし山は此より海にぬれぬは
即ち也也

思親眼也

ふらふらとひらきふりし山は此より海にぬれぬは
祈不念也

環者達也

ふらふらとひらきふりし山は此より海にぬれぬは
兼賦曉感

歸也書也

ふらふらとひらきふりし山は此より海にぬれぬは
遇不念也

契經年忘

ふらふらとひらきふりし山は此より海にぬれぬは
疑去偽也

ふらふらとひらきふりし山は此より海にぬれぬは
也事増也

ふらふらとひらきふりし山は此より海にぬれぬは
也

彼歌残恋

途中契函

後門帰恋

志行所恋

依恋祈所

隔遠路恋

借人名恋

後不知恋

未恨後恋

雜二十一首

曉更寢恋

序言松風

西中緑竹

Handwritten Japanese text in cursive style, corresponding to the section headers on the right page.

Handwritten Japanese text in cursive style, corresponding to the section headers on the left page.

浪洗石苔

山待月

山中遊水

河水流清

春秋遊花

閑居行客

山家夕風

山家人稀

海濱地

月霧中友

猿啼東面

海色也曉

了とていふの意をわづかしくせんからんが故に

わづかしく一語の長短をのまはさるるより

よりいふの下のあはれいふ人まゝの文を

いふのまゝの文をいふは

いふのまゝの文をいふは

いふのまゝの文をいふは

